

〇〇してみました世界のフィールド

フランスとマヌーシュ、ふたつの現場での子育て

左地 亮子
東洋大学准教授



子育てして(まかせて?)みました
マヌーシュのキャラヴァン居住地では犬や鶏や豚などと遊ぶこともできた (2008年)

学校の後に学習塾、これは現代日本では頻繁に見られる教育のかたちだが、子どもの教育は親の考え方だけでなく、国の方針、社会の傾向、所属する集団の文化からも影響を受ける。今号は移民大国フランスと、そこに住む移動民マヌーシュの教育について紹介する。



カーニバル(謝肉祭)での仮装行進。魔女に扮した幼稚園の先生に率いられた羊たち (2009年)

「ワーク・ライフ・バランス」ということばが普及した近年、研究者のあいだでも、ライフイベントと研究の両立をめぐる議論がかわされている。特に、長期間フィールドワークをおこなう人類学の場合、研究者が若手や女性であると、研究の重要な時期に結婚・妊娠・出産・育児のタイムミングが重なることがあり、この問題は避けておれない。わたしの場合は、フランスでの二年間の大学院留学・フィールドワークと育児期が重なった。研究と育児を両立する方法に唯一の正解は存在しない。研究・調査地や家庭の事情、子どもの個性によってさまざまな方法がありうるだろうが、わたしにとってこのふたつの仕事はフランスとマヌーシュという調査地、調査対象のおかげで幸運なかたちで結びついた。

フランスの幼稚園

フランスでも「保活」に苦労する親はいるが、保育園クラッセンユの重要性は日本よりも薄い。なぜなら、子どもは二歳半くらいから無償の公立幼稚園エコールマテルネル(保育学校)に通うことができるからだ。日本で保育園に預けていたわたしの娘も、この教育制度の恩恵を受けた。知人が地元幼稚園の園長に電話を入れてくれ、そして入園前日に娘のパスポートとワクチン証明を持参して園長と面談する、ただそれだけで外国人の娘の入園が許可されたことには驚かされた。フランスに住む子どもであれば、滞在許可書もフ



読み書きをしっかりと学んだ幼稚園 (2009年)

ランス語基礎能力も必要ない。移民大国フランスでは、社会統合の観点から小学校入学以前のフランス語初期教育が重視されており、義務ではないものの、大半の子どもが幼稚園に通う。給食と午睡をばさんで朝から夕方まで子どもを学ばせてくれる幼稚園の手厚い教育制度、そして園の教職員と仲間のおかげで、娘の日々の生活は充実したものとなった。また地域の人びとに支えられ、母子二人でありながら孤独を感じることもなく、わたしのフランスでの育児は日本にいたときよりも手がかららず、研究との両立はほとんど問題にならなかった。

マヌーシュの「教育」

さらに、娘はフランス社会に浸りながらも、わたしが調査対象とするマヌーシュ(フランスのジプシーの「集団」)の居住地で彼ら独自の「教育」を享受することもできた。

マヌーシュの子どもは、多くの場合、小学校から中学校まで現地の公立学校に通う。一般家庭とは異なり、親元から離れる、読み書きを学ぶのには「まだ早すぎる」として、幼稚園に子どもを通わせる親は少数派である。依然識字率は低いが、それでも、中高年世代では小



マヌーシュの小屋でチョコレートに囲まれて復活祭を祝う (2009年)

フランス

学校のすらほぼ通わなかったという人が多いので、就学率は上昇してきたといえる。人類学は「教育」の概念や方法の多様性を報告してきたが、マヌーシュにも独自の「教育」とよべるものがある。まずそれは、大人の仕事を覚えてまねさせることである。一〇歳にも満たない女の子が赤ん坊の世話をする、男の子が鉄くずの選別分解作業を一通りこなすなど、わたしの目から見ると危なっかしいのだが、親たちは「マヌーシュの子どもとはそういうもの、幼いうちから仕事ができるようになるのだ」と誇らしそうに見守る。そして、大人たちは数々のキスで子どもを褒め、いかにその子が素晴らしいのかを口に出して伝える。学習レベルや被差別体験などから学校になじめないマヌーシュの子どもは多いが、彼らがいっつも自尊心をもち堂々としていられるのは、こうしたマヌーシュ流「教育」の効果かもしれない。大人が子どもの欲求・要求をすべて受容するマヌーシュ流子育ては、幼いうちから自立・自律や社会の規則を習得させる傾向のあるフランスの一般の人びとから、大人に従わずやりたい放題の「王様子ども」を育てると批判されることがある。しかしわたしは、娘がおなかをすかせていないか、さびしい思いをしていないかと常に心をくばり、日本の祖母のように彼女をおおいに甘やかし、そしていつも力強く抱きしめてくれたマヌーシュたち、幼稚園とは異なる方法で彼らが与えてくれた「教育」に感謝している。